

執筆者紹介

明田川聡士	(あけたがわ さとし)	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
八木はるな	(やぎ はるな)	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
小笠原欣幸	(おがさわら よしゆき)	東京外国語大学大学院総合国際学研究院
周 俊宇	(しゅう しゅんう)	東京大学大学院総合文化研究科博士課程
井上 弘樹	(いのうえ ひろき)	青山学院大学大学院文学研究科博士課程
森田 健嗣	(もりた けんじ)	東京大学大学院総合文化研究科学術研究員
西 成彦	(にし まさひこ)	立命館大学大学院先端総合学術研究科
堀江 俊一	(ほりえ しゅんいち)	至学館大学
羽根 次郎	(はね じろう)	明治大学政治経済学部

編集委員

上水流久彦（副委員長）、洪郁如、佐藤幸人（委員長）、澤井律之、清水麗、張士陽、野間信幸

編集後記

ようやく第16号をみなさまのところにお届けできます。作成にご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。執筆者および査読者のみなさん、様々なご助力をくださった方々、本当にお疲れ様でした。また、今号もこれまで同様、一般財団法人台湾協会から補助をいただいております。心よりお礼申し上げます。

一方、困ったことに半ば恒例になってしまいましたが、刊行の遅れ、お詫び申し上げます。今号では副委員長の上水流さんに、これまで委員長が行っていた作業の一部を肩代わりしていただきました。それでも、刊行を早めることができませんでした。作成においては、審査の段階と編集の段階があります。編集の段階は書式などのぶれを避けるため、委員長が一括して行っています。その結果、わたしのところがボトルネックとなってしまいがちです。次号の投稿の募集にあたっては、執筆要項をより明解にするなど、工夫をしていきたいと思っております。

第16号につきましては、昨秋、合計17本の投稿がありました。審査を経た結果、このように6本が論文として掲載されることになりました。つまり、採用率は35%ということになります。第14号は16本の投稿があり、8本が論文として掲載されました。採用率は50%です。第15号は11本の投稿があり、3本が論文として、2本が研究ノートとして採用されました。採用率は45%です。なかなか傾向を読み取ることは難しいですが、やはりまず投稿がなければ始まりません。第17号でも第16号同様、多くの投稿があることを期待しています。

今号の書評は2本です。昨年のように10本は難しいとしても、もう少し集めたかったのですが、執筆者が見つかりませんでした。でも、いきなりゼロにはならなかったのが、書評の定着に向けて前進することはできたと思います。

また、今号から賛助会員となっている出版社の広告を掲載することにしました。これは賛助会員と会員の関係の強化を目的としています。

最後に雑感を少々。編集作業は上述のように、ちょっと骨の折れる作業なのですが、多分、携わっていなければ気がつかないようなことに気づきます。例えば、日本語の英語化の進行です。さらに具体的な例をあげると、サブタイトルの表示が変わってきています。『日本台湾学会報』では、編集段階で2文字分のダッシュをサブタイトルの前後に付けることに統一しています。これが元々のスタンダードだと思います。しかし、最近、投稿される原稿では、英語と同じようにメインタイトルとの間をコロンでつなぐケースが増えました。背景には学問全体における英語の影響力の増大や、メールやインターネットといった英語をベースに発達したコミュニケーション手段の普及があるのだらうと思います。恐らくもう少しすると、コロンの方がスタンダードになっているかもしれません。編集担当者としては、幾分、保守的に構えつつも、タイミングを計りながら世の流れに合わせて行くことになるのだらうと思います。 (編集委員長 佐藤幸人)

日本台湾学会報 第16号 2014年6月30日発行

編集・発行：日本台湾学会『日本台湾学会報』編集委員会
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学東洋文化研究所 松田康博研究室気付
E-mail：nihontaiwangakkai@gmail.com
ウェブサイト：http://www.jats.gr.jp/